

プロフィール (2021年10月25日作成)

奥間 政則 (おくま まさのり)

1965年9月14日生まれ(出生地：奄美大島) 56歳

沖縄県国頭郡大宜味村在住

職業：建設業 (1級土木施工管理技士)



高校、専門学校と土木を学び、20歳から土建屋として経験を積み、2009年に会社を辞めて個人で土木関係の図面を作成する仕事を請け負っていましたが、2015年の出来事がきっかけで私の人生は大きく変わりました。無関心な人間でも何かきっかけがあれば変われるんだということを自分自身が実感しています。

人生を変えた2015年の二つの出来事

1. 基地反対運動に関わったきっかけ

2012年にオスプレイ配備に反対する10万人の県民大会に参加したことで県民の基地反対の熱い思いを感じました。その後2014年に翁長知事が誕生し、2015年の5月に辺野古新基地建設反対の県民集会に参加することで、多くの県民と共に基地建設に対する反対の意思を強めることになりました。

10年以上前から同じ部落の近所に住んでいて辺野古・高江の運動に参加している方から一緒に基地反対運動に参加しないかと誘いがありましたが、そのたびに仕事を理由に断っていましたが、2015年の5月の県民大会参加がきっかけとなり、熱心に運動参加を呼びかけていたその方に誘われ、県民大会の2日後に東村高江の米軍の北部訓練場のヘリパッド反対の座り込みに参加するようになりました。

2. ハンセン病の差別問題に関わったきっかけ

私の両親は元ハンセン病患者ですが、両親は子供たちにも一切ハンセン病のことを語りませんでした。時は流れ2012年ごろから父が手記を書くようになり、その中で戦後ハンセン病を発症したことが記されていましたが、その時も父はハンセン病の差別について話すことはありませんでした。そしてさらに時が流れ2015年の6月に両親が歳入園した名護市のハンセン病施設「愛楽園」に資料館が開館したことで、自分でハンセン病のことを学ぶために通うようになり、学芸員の方から『ハンセン病証言集』の中の匿名で書かれている父の証言を見せようと、そこには手記にも記されていなかった事実があったのです。なぜ私が奄美大島で生まれたのか、そして父はハンセン病が治って社会復帰しても、ハンセン病に対する差別・偏見で苦しめられていたという事実を50年経って初めて知った時の衝撃はあまりにも大きかった。

3. 国策と闘う覚悟を決めた2015年

本土上陸を防ぐために沖縄を犠牲にした日本という国が、国策の名の下で沖縄に基地を押し付けてきたこと、国策の名の下でハンセン病患者を世間から隔離し、ハンセン病を根絶する名目で断種・墮胎を行ってきた事実を知り、基地問題もハンセン病の問題も形は違いますが、弱者に対してしわ寄せがくるという点において、国家権力が国策によって行ってきた『差別』の構図は同じものだと気づきました。

父の手記、愛楽園の証言集、基地反対の県民大会への参加など、今まで止まっていた歯車が動き出すように時を見計らっていろいろな出来事が重なり、沖縄の基地問題とハンセン病問題にも向き合うようになったのが同じ2015年です。1965年に生まれてちょうど50年という節目の年に、これまで無関心だった私の人生は一変し、国策による差別と闘う覚悟を決めました。

現在行っている活動

2015年から高江のヘリパッド建設反対運動に関わり、2016年からは辺野古の基地建設反対の運動にも関わるようになり、土木技術者としての経験を活かして技術的な面から工事の問題点をあぶり出しています。また、「あつまれ辺野古」という小さな団体に所属し阻止行動にも参加して、2018年には「沖縄ドローンプロジェクト」を共同で立ち上げ、ドローンを活用して現場の状況の撮影や不正工事の実態を暴くため、高江や辺野古だけではなく琉球弧という広範囲に展開している自衛隊基地の撮影も行っています。そして土木技術者として取り組んできたことが学者ともつながり、辺野古の調査団としても活動をしています。

さらに東京新聞に私の記事が掲載されたことがきっかけで、2017年からは沖縄の基地問題とハンセン病問題の二つの国策の差別をテーマに、全国で講演活動も行っています。